

時代
小説
自選集
第七卷

由比正雪 上

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集 第五卷

ごろつき船(下)

昭和四十六年一月二十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

由
比
正
雪

装丁・題簽
見返し絵
佐多芳郎
中村岳陵

老人

その老人は、どう見ても七十より下のことはないだろうと思われた。髪などすっかり白くて、軀も癯せて薄いし、腰も幾分曲っている。甲賀者というような伝説的な忍びの名人に、人が考える敏捷そうなところはどこにも見られない。目も皺の中に細く隠れていて、あいていて半分睡っているような感じを与えたのである。

それにも関わらず、これは甲賀者なのだ。はるばると近江の国から、この九州の南の果まで呼び寄せられて来たのだ。今度の原城攻撃の総大将松平伊豆守信綱が呼び寄せたのでやって来て、今朝着いたのである。甲賀者の中でも家柄の者で、大曾根源五兵衛といえは関ヶ原大坂夏の陣にも手柄を立てた男だそうだが、見たところは、家来を三人連れてくるが、その辺の百姓の名主ぐらいの男が、陣中の見舞いに来たぐらいにしか見えない。話声も低い。永く立っているのも大儀そうに見える。特徴を探せば、普通の年寄より一層不機嫌で氣むずかしそうに見える、何をいっても、にこりともしないでいるくらいなものだ。

実をいうと、城にいる切支丹の一揆が案外に手がたく守っていたので、永い埒のあかない攻撃に好い加減しびれをきらしていた

武士たちは、甲賀者が来たというので幾分か希望を感じるし、好奇心を持って用に託してのぞきに来たのだ。

甲賀者たちは、着くとすぐ老人を先頭に本陣へ行って総大将の伊豆守に会った。智恵伊豆というあだ名が伝わっている有名なひとである。老人の源五兵衛には床几が与えられ、遠いところを御苦勞だったという挨拶で、

「大分の御年配のようであるが、幾歳になられる？」

と丁寧いきいた。

床几をすすめられても、なお立っていた老人は、

「七十二歳になります」

と、答えた。

「七十二歳？」

伊豆守は、はつきりした目を向けて微笑した。

「関ヶ原や大坂の陣を御存じのような話だな。私などは、実際の戦いに出るのは今度が初めてなのだ」

と謙遜した調子でいって、仕事のことは、ほかの者から話があるはずだから何分たのむといって引取らせた。

その仕事というのは、無論、敵のいる城内へ忍び入って様子を探って来ることだった。幕府が、たかが百姓どもの一揆と見くびっていた敵を、寄せ手は最初の大將板倉重昌を戦死までさせて、去年からかかってまだ城を抜けないでいるのだ。原の城は要害堅固の上に三万に近い城の者は信仰から團結していることだし、武器や糧食も充分に仕度してあったので、案外に思われたくらい頑

強^いな抵抗をして寄せ手を悩ましていたので、伊豆守は包囲を嚴重にして城方の兵糧^{ひやうりやう}が尽き士氣が衰えて来るのを隠忍^{おんにん}して待っていたのである。城の内部の模様を何とかして知りたいと思うのだった。

甲賀者たちは、次の日から味方の第一線に出て、地の理、案内を研究し始めた。これは老人について来た家来たち三人がやるので、当の大曾根源五兵衛は滅多に出ない。大方は陣中であてがわれた宿所にて昼の間もぶらぶらしている。夜になると、こっそり外へ出て行くのだという噂^{うわさ}があったが、見た者はない。宿所にいて相変らず氣難^{きがた}しそうな顔付で手下の者の報告を調べたり、また肩や足腰を揉^もませて休んでいる。特に真剣に役目のことを考えているようにも見えないのである。

三日、四日と、日は経って行った。

「甲賀の者は何を致しておりますのか？」

と、伊豆守の参謀の中でも不平の声が漏れるようになった。

伊豆守も、それを考えていたのだが

「年寄だから、氣が永いのか？」

と、笑っていて取りあわない。

氣短い男が直接催促がましいことを告げに行くと、源五兵衛はつめたい目を向けて

「伊豆守さまのお言葉に御座りまするか？」

と、問い返す。

家来の者も、三人とも無言でいる。何となく、種類の違う人間

のどこへ来たような心持を客は感じるのである。

こうしている内に、寛永十五年の二月もなかばを過ぎた。この南九州では早くも花が咲くのである。春らしい雨に、堡壘^{ほりう}の石がぬれ旗じるしが重く垂れる。その一夜に、いつ、どこから入ったものか、大曾根源五兵衛の瘦せた姿が忽然^{こつぜん}と原の城の二の丸の關の中を歩いていたのである。

翌々日の晩に源五兵衛は無事に味方の陣に引返して来た。城の者の糧食に窮して草を食べていること、また男手では足りなくなつて女や老人まで得物を採っていることなどを、出丸毎の大体の人数とともに届出て来た。

伊豆守は満足げに、この上もなお、やってくれと頼んで、その他に何か変つたことはなかったかと尋ねた。源五兵衛の返事は騒がしい城で御座いますというのだった。

「むむ、歌を唄うからか？ あれは切支丹の祭りだ」

と、伊豆守は笑った。

しかし、源五兵衛が騒がしいといったのは、多勢で唄つたり祈つたりしていたからではない。

「手前のまいましたのは、夜で御座いました。不寝の番の者のほかは、人の寝静まる刻限で御座りますが、別段の音はなく、なんとなく騒々しいので御座ります。これまでの戦^{いくさ}と違い、百姓どもの多人数集まりました上に女子供のおる加減で御座りましょうか？」

と、首を傾^{かたむ}げた。

源五兵衛が退って行つてから、伊豆守は近臣を振返つた。

「話はすっかりしているが、どこか一風変わったところのある爺だ
な」

と批評した。

源五兵衛が二度目に城へ忍び入つたのは、遅い月のある晩だつた。濠を渡り石崖をよじ登つて、相変らず楽々と城内へ忍び入つた。灯を消している砦や櫓に人の話声はしていたが、それを抜けてなお奥へ入ると、月に花が朧なだけで、どの小屋も寝しずまっている。源五兵衛は、木蔭や、小屋の裏を拾つて、時々立ち止つてあたりの気配に耳を傾けて、注意深く踏み込んで行つた。出来れば敵の本丸へ入つて人の話しているところを聞いて、味方に何かみやげにしたいと思ふのだった。

急に人の来る様子だった。石段を降りて来るのである。槍か何か地面に衝いている音がする。話声が聞える。

しかし、これは、九州人独特のなまりのある疾口の言葉で、源五兵衛には外国人の話の聞いているのも同じことだった。源五兵衛はちんと堅い壁にでもぶつかつたように感じた。城の者が全部こんな言葉で話しているのなら、いくら奥へはいつたところで、何の話をしているのか聞いたところでわかりようもないと思うのだった。その時に、どこかで戸のあく音がした。男の声で外から何かいふと、これに答えて女の声で何かいふ。

源五兵衛は、影のように、その方角へ歩いて行つた。

話声は今源五兵衛が廻つた狭い裏手とは逆側の表口でしている

のだ。窓から灯影が漏れている。注意深く、そこからのぞき込むうとした。「重蔵なのだ」と、はつきりわかる男の声で聞えて来た。

「いつものように敵が降参をすすめて来たものかと思つて拾つた者が本陣へ持つて行つたのだそうだが、……宛名は私たち夫婦になつているとかで、今届けてくれたのだ」

障子の奥から、声の主は姿を現した。陣中からすぐ引返して来たと思える鎧を着た中年の立派な男だった。纏帯した手に書状らしいものを持つてゐる。その後から出て来たのは男の妻らしい、やつれてはいるが美しい女だった。

「つな」

と、男は、女を振返つた。

女は、吸い寄せられたように見ていた手紙から顔をあげた。男は妻の目に涙を見て、いいかけていた言葉を急に途切らせた。

「この城は遠からず落ちる」

「……………」

「我々が死ぬのはきまりきつてゐるし、宗門のために死ぬのは最初から望むところだったが……子供まで一緒に死なせる考えはない。連れもあるようだが、第一この嚴重な敵の包围を破つて城へはいれるなどと考えてゐるのは、とてもないことだ。読んだのか？ 時江も連れて来たような話だが、とてもないことだ」

男は流石に涙を見せなかつたが、もう畳の上に泣き伏していた妻の姿に、自然と目をそらしていた。

源五兵衛は、石崖を降りて、濠を渡った。月影をといて、明るい水蒸気の霧が平地にひくくはっている。その底に点々と赤くかすんで燃えて見えるのが、味方の陣地の篝火だった。戦のない夜はひっそりとしていて、遠い磯波の音さえ聞えるのである。

味方が作った鹿砦がある。それをくぐろうとした時に、急にどこかで銃声が上がって、静かな夜気の中に、山々に反響を呼んだ。弾丸はすこし先の地面へ落ちて、小さい土煙をあげた。

源五兵衛は地に伏した。目の前数尺のところに、これも味方が敵の脱走を防いで掘った、土の濠が黒い帯のように見えている。追撃の銃声を聞きながら、その縁まで行って、身を躍らした。その途端に、底の闇の中から急に立ち上った者がある。風のように駆け寄って来て、短刀か何か短く光るもので、鋭く突き掛けて来た。

源五兵衛は体をかわして、その腕を抱え込んだ。投げようとして敵の脚がからんだので自分も一緒にころがって敵の上になった。その途端にうめき声を聞いて、見ると、敵はもう抵抗をやめているのだった。源五兵衛は、短刀の刺さっている小さい胸から仰向いている敵の顔を見た。

前髪のある若い顔である。

源五兵衛はこういうことになって動揺することのないつめたい目でじっとその苦悶を見詰めていたが、そのまま濠についてあるき出そうとした。その足を若者の最後の呼び声が急にとまらした。

源五兵衛は胸の中にうすら寒い影が通るのを感じた。若者は「父上！」と叫んだように思われたのである。引返して再び、若者の顔を覗き込んだ。

「お前さん……」

と、声を途切って

「重蔵さんというのか？」

と、いった。

若者はこれを聞いて、大きく目をみひらいた。子供が、ものに驚いた時の、精一杯に見詰めた目である。けれども、その、こまかい一点にかたく集められていた光は急に碎けて、雲をかぶったように濁った。何がなしに源五兵衛はあわてていた。

「重蔵さんというんだな。お前」

若者の胸は、大きく、ひとつ、波打った。

源五兵衛が呼吸を詰めて見まもっている中に、まぶたの蔭から涙が白い頬に流れた。手を取って見ると、もうつめたくて、重い。源五兵衛は、さっきの、暗い行燈の灯に額を集めていた夫婦者の姿を見た。その声を耳の中に聞いた。

味方は城方から撃った銃声を聞いたので、途中まで迎いに出ていた。源五兵衛が昼間の戦場を突切って歩いて来るのに会って、無事をよろこんでくれた。源五兵衛は、この人々と一緒に歩いて戻って、何もいわず、すぐ自分の宿所へ戻って行った。

翌朝、伊豆守から迎いが来て、源五兵衛は本陣へ行った。

「狙撃されたそうではないか？ 怪我もなかったのだな」

伊豆守は、いつものように気難しく見える老人の姿を、智恵のある大将にふさわしく柔和に微笑して見まもった。

「して、何か収穫はあったか？」

「御座りませぬ」

というのが源五兵衛の返事だった。

「近寄って話を聞くように致しましたが、どちらへまいってもこちらの言葉で、手前どもには何の話か皆目わかりかねました。おそれながらこれ以上、手前の致すことはないように存ぜられま

す」

伊豆守は目をあげた。

「誰か、土地の者を連れてまいるようには行かぬか？」

と、静かにいった。

源五兵衛はあまり気がすまないような顔色だったが、最後には大将の仰せならば、無論引続き大馬の労をいとわぬつもりであるが、ほかの甲賀者でない人間を連れて城へ入るのは到底出来ないことだろうと思うと答えた。

これだけのことであったら、大曾根源五兵衛は、例の親子のことを忘れてしまったかも知れない。ところが、源五兵衛は、偶然に自分の手に掛けた若者の母親の姿を見掛けたのである。それも意外な時、意外な場所で。

暮れて間もない時刻で、源五兵衛は家来の者には何も告げずに外を歩き出していた。戦場に近いとはいえ、付近は樹木が多くて、それも、季節にしろ源五兵衛の故郷の今頃に比べると、不

議なくらい鬱蒼と繁っているのだ。樟の大木が道ばたに根を張っている。樟の木が至るところの百姓家の垣根になっていて、こぼれている大輪の花が何か生物でも踏んだように草履の踵にあたるくらいなのだ。空気は花の匂い、草の香を籠めて、初夏の夕方を思わせるくらいだった。

こういう戦場の付近には、どこから来たともわからず、丁度雨後の溝から蚊がわいて来るように白粉をつけた若い女たちが現れているものだ。この連中は夜になると陣屋の幕の外まで来て、まだ昼間の合戦の埃を洗い落すひまもない強者たちをなまめかしい声で誘いに来るのである。だから源五兵衛も最初その女が向うから来るのを見た時は、そういう女の一人が来たものだと思っていて、すれ違う時も年寄らしい臆面のないやり方で、わざと顔を覗き込んで見たのであろう。思わず叫ぶところだった。

あの女だ！

源五兵衛はぎょっとした。

女は通りすぎていた。目の合った途端に黒い目がつめたく動いて源五兵衛の顔を見ただけで、紙のように無表情な白い顔が見えただけだった。恐らく、その刹那に、源五兵衛の黠面にあらわれた驚きの色も、それが直ぐに変った茫漠とした不安な面持にも気がつかずに行つたのではないか？ 何か一つ強い感情が女のこころをとらえていて、別のことを気にする余裕など、なくさせていたのではないか？

それよりも、源五兵衛は自分の目を疑わずにはいられなかつ

た。

よくある他人の空想という場合を考えないでもない。しかし、そう反省しても源五兵衛がその刹那に感じた烈しい動揺は鎮まらなかった。行燈の暗い光で見たものながら、源五兵衛は、女の顔をはっきりと覚えている。名工の腕でぎざまれた像が、見たあとまでも人の胸に消し難い印象を残すように、これは生きた人間の母親の、強い悲しみを現した忘れ難い姿だった。今、源五兵衛がすれ違った女の顔は、その悲痛が一層強められて出ているほかに、城の中で見たものと、一分も違ってないのだ。ただ、どう考えても不思議でたまらないのは、これだけ嚴重に包囲されている城の中にいた女が、いつの間にか囲みの外へ出ていたということだ。源五兵衛のような甲賀の忍術者でも、いつも出掛ける時は生きて帰れない覚悟で出るくらいなものを、濠があり矢来が組んである上に、城方の者でそれも女の身で、そう易々と出て来られる筈はないのだ。

急に源五兵衛は、女のとをつけた始めた。どこにどんな人間と一緒にいるのか？ 或は、例の夫も同じように城外にぬけ出ていて、包囲軍をはさみ撃ちにする陰謀でもあるのではないか？ これらの職業的な注意のほかに、源五兵衛は急にこの女の行動に心を惹かれていた。いや、行動というよりも、その悲しみに心を惹かれていたのだというか？ 源五兵衛自身が心ならず女の愛児を手にかけて、この悲痛の原因を作ったわけではないか？ 女は、もうそれを知っているだろうか？ 知っているとしたら、ど

んな風に感じ、どういう様に考えているのか？ それから、死んだ重蔵という若者の妹は、やはり一緒にいるのか？ これは、ただの興味や好奇心だけではなく、もっと強く源五兵衛の心をつかんで目に見えない綱で手繰り寄せて行くものだった。

夜は、もう、すっかり地面を蔽っていた。半町はなれると人の輪郭が闇に消えるし、道は木立が多く変化の烈しい地形に従って坂になったり民家について急に折れたりするので、追跡は思ったより難しいものになった。距離をずっと詰めて絶えず目をはずさないようにしなければいけなかった。

そのせいも、あったのだろうか？ やがて、女は、源五兵衛の追跡に気がついたらしい。二三度振り返って白い横顔を見せてから急に早く歩き出したのである。

間もなく大曾根源五兵衛は不覚に女の姿を見失っていた。

道が二つにわかれている。この方角と思って源五兵衛が入って行ったのは、違っていた。女が駆け込んだのは別の道であろう。すぐに引返して後を追ったが、そこは間もなく崖に行き詰まって、木の繁っている右手の墓地へあがるよりほかはなかった。

崖の上に出て見ると、すぐ下に味方の陣が見えた。暮が風に煽られていた。篝火の傍を番卒が歩いている。やや遠方に見える城の様子から考えると、これは鍋島勝茂の本陣だ。兵隊たちはずっと前方に進んで二の丸の敵と対陣しているのである。

源五兵衛は女を逸したからといって別に落胆していない。それよりも、星空に黒く立っている城を眺めている内に、今の女が真

実あすこで見た女かどうかは、また城へ入った時あの小屋を覗いて女がいる様子かどうか見ればわかることだと、明るく考えなおすことも出来たのである。

源五兵衛は歩き出そうとした。

その途端に、ふと目にとまったものがある。城の櫓の上で、提灯を振っているのである。不審なのは、その振り方だ。左右にゆるく動かしているかと思うと、急に止って動かなくなる。また、それが上下左右にやや複雑に動き出す。人が誰かと話しているように、動いてはやみ、やんでは動く灯だ。

（合図だ！）

源五兵衛は叫ぶところだった。

城でやっているように、こちらでも誰かがやっているに違いはない。残念なのは、深い木立の中にいて、その相手方のいるところが見られないことだ。

「おーいー」とさびのある声で下の陣地に呼びかけた。

「おーいー」

人が走り出して来て、源五兵衛のいる崖を見上げた。

「甲賀の者ですが、どこか、この山手で灯を振っているのが見えませんか？ 城と何か合図をしているようです」

「……………」

「城の櫓を見なさい」

意味が、下にいる者にはよく通じないらしい。源五兵衛は、やきもきした。その内に櫓の上に見えていた灯は、急に消え、その

方角はほかと同じように、真黒な闇となっていた。

元来こんなに騒ぐのがこの老人としては珍しいことだったの
で、灯が消えると一緒にいつもの気難しい顔色に戻って、今度は下からいろいろと何かいって来るのにも答えずに、むっと口をつぐんでいた。源五兵衛は歩き出した。

今の提灯の合図に、先刻の女は関係がないのだろうか？ 源五兵衛には、それが有りそうなことに思われた。また、味方は海陸の双方から完全に城の者を封鎖したと信じているが、城の内外に或連絡があることは疑うことが出来ない。城の外、包圍軍の背後にいる敵の勢力の如何いかんによっては、由々しき大事ともなることなのである。

実をいうと大曾根源五兵衛は城の中で夫婦者の話を聞いた時も、この夫婦の子供が親を慕って外まで来ていると知って、いじらしき感じはしたが、事柄に重大な危険があることを、てんで考えていなかった。心持はむしろこの不幸な親と子に同情を寄せ、求めずにその子の一人を殺してしまったことに何かしら心がとめていたくらいで、このことは、まだ誰にも口外していなかったのである。源五兵衛は、聡明な目付を思い出した。やはり、味方のためには、大事をとって警戒させるようにするよりほかはないように思われた。

前面の闇に草履の音が聞えた。源五兵衛が見ていると、頭巾をかぶった平服の侍が来る。非番の者か、あるいは、従軍を望んで集まって来た浪人者なのだろうと思う。すれ違う。途端に、思い

がけなく、耳もとでささやく声が聞えた。

「老人、用心しろ、狙われているぞ」

源五兵衛は立ち止りかけた。冗談とも故意とも区別のつけようもない瞬間の言葉だ。男は通り過ぎていく。振り返りもしないで、とっとと坂を降りて、声をかける間さえなく、姿は木立の蔭に消えている。

並の速力で歩いているのではなかったことも事実である。その男自身が何かに追いかけていたように見えたのである。

事の真偽は知らないが、自分が容易ならぬ境遇に置かれていることはわかる。ただその男のいった危険がそれほど間近く迫っていたとは、源五兵衛も予期していなかった。戦場とはいえ味方の陣地の内なのである。

廻り道をして、坂を降りて、田圃のある平地へ出た。

野川があって、黒い水が流れている。

前面の山地が板倉主水、石谷十蔵の陣を敷いているところだ。

ひゅーッと、鋭い弦音がした。驚いて振返った時、箭は袖をかすめて土橋の縁へ立った。源五兵衛は二の矢に備えて油断なく身構えた。

自分が今降りて来た坂の木立の間からだ。

源五兵衛は走り出した。

雑木林の中を逃げて行く人影が見えた。勢込んで追って行く、藪の中から急に出て来た者があった。立ちなおった途端颯と斬掛けて来た。

老人と思われぬ敏捷さで源五兵衛も抜き合わせた。

大兵の力士のような男である。貌は黒い布でつつんであって、目だけが見える。切尖も鋭く、上押しにじわじわと詰寄って来る。

源五兵衛がやや受身だ。櫛糸を握った手が、汗ばんで来る。

ぱっと、男は飛び込んで来た。

源五兵衛の手もとで、刃はかみ合って高く鳴った。男は一気に押し切ろうとする。渾身の力で源五兵衛はささえた。

男は急に飛びすった。

源五兵衛が刀身の長さ一杯に送り込んだ一撃を軽くかわしたかと思うと、身をひるがえして走り出している。源五兵衛は後を追おうとした。

途端に、

「捨てて置きなさい」

と、叫んで急に出て来た者がいた。ひと目見て源五兵衛には、先刻用心しろとささやいてくれた男だとわかった。

武士は草の上を歩み寄って来た。近付いて来る頭巾の蔭にある切長の目だけを見ていた内は思慮の出来た三十より上の者のように思われたのだが、そばで見ると、まだ二十ぐらいの色白の若者だ。その目を長い眉が蔽っているし、鼻筋も高くとおって、顔の感じをかみそりのように鋭いものにしていた。しかしその顔が微笑すると、女のように柔和に見えるのを、源五兵衛は見た。

男は、

「後を追うまでのことも御座るまい」

と、もう、姿は見えなくなっていた敵の走り去った方角をのぞき込んで、いった。

源五兵衛は咄嗟に出た言葉は、

「何者です？」

と、いう疑問だった。

「私も存じませぬ」

と、若者は答えた。

「種々雑多の人間が入り込んでおりますからな。御老人は、誰かの後をつけていられたのではないか？」

「……………」

源五兵衛は、警戒するような目付で相手を見て、返事を躊躇した。

男は、これを見まもりながら、

「その人間の家来か手下の者だということは無論御承知であらう」

といって、

「それについて、拙者が伺いたいのは、御老人がつけていられた人間の素性です」

「……………」

「女でしたか？」

「そう……………」

源五兵衛は怪訝でたまらぬのだ。若者の問いは、声も言葉も

のやわらかでいて、しかも畳込んで来るような鋭い感じがある。それのみか、この相手は敵と見てよいか、味方と見てよいか、それからも即答が憚られるのである。

「失礼ながら、そこもとは？」と、問いかけた。

若者は、におうように色白の顔を微笑させて答えた。

「由比権之助と申します。この騒動で主取りをしようと思ひ、はるばるとこちらまでまいって、時機に遅れ益もなく遠方から戦を見物致しておる浪人者です」

それから、

「あとをつけられたというような話をしましたから」

と、由比権之助と名乗った若い浪人者は、老人のなお警戒するように見まもっているのを見て、説明を加えた。

源五兵衛は目を動かさずにいった。

「今の者たちが……………」

「いや、別の人間です。弓を射て逃げたのは女ではなかったのですか？」

(女?)

大曾根源五兵衛は、これを意外に思った。そういわれてから、木の間に走って行くのを見た後姿が男にしてはちとちいさすぎるように感じた。合せて自分も危く思った剛勇の敵が、殊に大兵な男だったので、それとは気がつかなかったのかも知れないのだ。

「それで」

と、若者はいった。

「御老人が尾けていられた女とは、一体何者なのです？ 城方には違いないでしょうけれども」

「私にも、まだ、よくわかっていない」

老人は、なお油断をせずに答えた。

「しかし、あんたは、また、なんでかれらに目をつけていられるのか？」

これを聞いて若者は微笑した。

「ただ、気になったからです。城方とも寄せ手ともつかず、また、われわれと同様に、召抱えになることも出来ず、時期に遅れて城に入ることも出来なかった浪人とも見えぬところがあつたからです。と、いって、今の連中が相当の人数で女も加わっているということは、今夜初めて知つたのです。私がにらんでいたのはついそばに宿を取っている男二人だけだったのですが……城とも何か連絡のある様子ですな？」

「……………」

源五兵衛はこの白面の若者に新しく驚きを感じるとともに畏怖を感じた。これは、どちらかといえば自分の役目のことで、しかも源五兵衛がこの人数のことについて知つたのはまったく偶然が幸いしただけのものなのに、話のとおりならば、この若者は付近に宿を取っているというだけの浪人者を観察している中に、事件のいきさつを源五兵衛よりも深く突っ込んで見抜いたように取れるのである。

このことは、自尊心の強い老人に、重い憂鬱を感じさせたようである。源五兵衛は、いよいよ鋭く、若者の柔和な顔を見まもつていて、話をどこまで進めたものかと思索していたのだ。

由比権之助は、自由な心持でいるらしい。

「老人が尾けていられた女は、あの者たちに奥方と呼ばれているひとです。私の見ていた男たちは、奥方が尾けられているからというので呼び出されて来たのです。私はかれらが出て来るものと思つていたが、出て来たのを見ると別の人間でした。女は、あの壮士の主ですな。けれど、奥方といわれる、老人の尾けていた女性とはまた違うように見えたのです。あなたの尾けられたのは、若い娘とは違いますか？」

「……………」

「十五六の？」

「違います」

源五兵衛は、ひらめくものを心を感じながら、こう答えた。

娘だ。時江も連れて来ているようだ。城の夫婦者の話の中の言葉之急に思ひ出したのである。あの、死んだ若者の妹なのではないか？

「弓を持っていたのが、そんな小娘だったといわれる？」

老人は、憂鬱な調子で訊いた。

由比権之助は、相変らず静かな顔つきで答えた。

「そう、見えました」

「……………」

「すると、あなたの尾けていられた女は、母親だと見えますな。そうでしたか？」

榮しげである。それは由比権之助が源五兵衛の答えを得る前に、事件の中に二人の女がいてその女たちの関係が母と娘だと見えていて、それを源五兵衛に尋ねたのは、単に自分の推測を確めるつもりだったせいでもあろうか。

決 闘

ここに椿の花が咲いていて、樟の若葉が夜氣の裡に漂っている。石崖を積んで道路より一段高いこの辺によくある民家の一つである。由比権之助は、段を登ると庭を横切つて母屋の側面にある別の棟の戸口をあけた。廊下の奥に灯影がさしている。手前の、灯影のない部屋が数日前から権之助の仮の住居になっていた。

権之助が屋内に入った時、奥の部屋でしていた話声が急にやんでいたが、

「戻られたか？」

と、襖越しにいう。

行燈をあけて灯を入れていた権之助は、

「お寝みではなかったのですか？」

と、静かに応じた。

ははははははと、襖の向うで声の主は快活に笑いあげた。酒の入っている声である。

「寝て、起きたところじゃ」

と、ぼつんと切つて、一緒にいる人間に、こちらには聞き取れない低い声で、何か囁いたようだった。客は女である。聞えぬように心をくばっているが、さやさと衣ずれの音が聞える。つげたばかりの行燈の灯影を受けていた権之助の若い横顔に、かすかな微笑が浮んで来る。しかし、それ以上はかき合えない様子で、大刀を戸棚にしまい、袴をぬぎにかかっている内に、隣の客が廊下づたいに出て行く様子で、主の重い足音が一緒に立つてずしんずしんと戸口まで付いて行つて、やがて帰り道にこの障子の外でとまった。

「酒がある。来ませんか？」

という。

「お邪魔ではなかったのですか？」

権之助は、戸棚の脇からはなれずに、いった。

「邪魔？ はははははは」

この、毒のない大きな笑いが、隣の男の特徴らしい。

「待たたまえ、風を入れて不浄を払おう。尊公のために！」

ずしんずしんという足音は、また隣の部屋へはいって行つた。

廊下の障子を一杯にあげ放した音がして、

「蛙が鳴いているな」

とちよつとの間、物音がやんだ。

「来たまえ」

と、いう。

隣もやはり、こんどの戦いをあて込んであると来て、どこかで口を得ようとして時期に遅れた浪人者なので、権之助の部屋と同じように、殆んど荷物らしい荷物はなかったが、それでもこの部屋は、主の一風変わった人柄を映して見た目に異様に思われるのだった。

主というのは、これは声のやさしいのに似ず、でっぷりと肥ったつるつるの大坊主で、それも、両耳からあごへかけてふさふさした見事な髯を貯えている男だ。ひげの中にまばらに白いものが見えるのは五十に近い証拠であろう。目尻にも皺が寄っている。肥ってはいいても、永く酒を嗜んだ加減であろう、顔色も不透明で、土のように蒼黒くて、酒を飲んでゐる時のほかは、目もとにあきらかな疲労の色が見えている顔である。

着物は、いつも法衣を着ていて、両刀は佩びずに、太い鉄鞭を杖に突いている。街道筋を黙々として髯をしきながら歩いている姿を見ると、誰でも振返らずにはいられない異様な風采である。由比権之助が初めてこの男を見たのは、黒田家の陣屋で浪人を召抱えると聞いて募集に応じて行った時に、この男がやはり志願者の中に例の鉄鞭を突いて傲然と立っているのがひどく人目を惹いていたからである。

陣屋では、早朝の内に、浪士の採用を終っていた。それでも応

募者は続々と詰め掛けて来て事情を聞いて失望してまた散って行く中に、この大坊主は何も知らぬ様子でいつまでも幕の前に美髯をしきながら、堂々と突っ立っていたのだ。権之助がそばへ寄って注意してやろうと思った時に、黒田の家来がこれも、大坊主がいっまでも待っている様子に気がついたらしく、傍へ行って話してやったのである。

「豪傑！」

と、多分は名を知らなかったので呼びかけようがなくていった言葉であつたろうが、如何にもその堂々とした風采に合っていたので傍に聞いていた権之助も思わず微笑したのである。青鬼というのが通称だったこの大坊主はこの呼び方をされても別段愚弄されたとは思ひなかつたらしく振返った。またもう締切った後だと説明を聞いても大した失望もしなかつたらしく泰然として、

「はははははは」

と、これも後にこの男の癖だと判つた朗らかな笑い声をあげ、鉄鞭を突きながら、来た時と同じように堂々と引揚げて行った男である。この青鬼が支那から帰つて来た男だとは、権之助もそれから後になって他人に聞いたのである。

この時分に唐土へ渡つて来たというだけでも、権之助のような若者の驚嘆に値した。偶然に権之助が移った家に、しかも襖一枚を隔てただけの部屋に、この大坊主の青鬼が引越して来たのが、若者の好奇心を充たす好い機会となつた。青鬼の方でも、この謙遜で、いきいきとした若者に好意を感じたらしく、権之助の問い